弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

社会福祉学部・社会福祉学科
高橋　和幸

作成日　2023年8月17日

1. 教育の責務

2012(平成24)年から弘前学院大学社会福祉学部・社会福祉学科の専任教員(准教授)として採用され、本年で11年となる。2018年度からは教授となっている。

社会福祉の専門科目の講義、演習、実習、実習指導科目を担当している。専門講義科目では地域福祉論Ａ・Ｂを担当し、ソーシャルワーク演習Ⅰ・ソーシャルワーク演習Ⅱ・ソーシャルワーク演習Ⅲを担当すると共に、現場実習と実習指導にもあたっている。

学内においては社会福祉学部学務委員会委員、入試委員会委員、実習指導室会議委員などを務めている。

現場と教育機関としての大学との連携を深めそこで得られた知見を教育活動に活かすために社会福祉法人弘前市社会福祉協議会評議員、横手市健康の駅推進会議委員、弘前市雪対策懇談会委員等を務めている。

大学公開講座には「人を助けること―福祉の仕事のやりがい―」、「雪国らしいボランティア―除雪ボランティアの魅力―」の2つのテーマを提供し協力している。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
ソーシャルワーク演習Ⅰ	1年	演習	後期	社会福祉士指定科目の一つである。ソーシャルワークの知識と技術の習得及びソーシャルワークの価値規範や倫理の基本的事項の理解を図るために、具体的な援助場面を想定したグループディスカッションやロールプレーイングを取り入れながら演習授業を行っている。
基礎演習Ⅱ	2年	演習	通年	2年次必修科目である。学生による発表やディスカッションを通して、生活上の様々な問題への興味・関心を深め、専攻分野の学修への意欲と基礎的学修能力を高めてもらえるようゼミ形式での授業を行っている。
社会福祉実習Ⅰ	2年	実習	前期	社会福祉士指定科目の一つである。実習先となる施設・機関の実習指導者と学内担当教員によるスーパービジョンを行い、履修学生が現場にてソーシャルワークの体験学習を行う。社会福祉実習Ⅰは60時間の現場実習である。

社会福祉実習指導Ⅰ	2年	演習	集中	社会福祉士指定科目の一つである。社会福祉士として求められる役割を理解し、価値と倫理に基づく専門職としての姿勢を養うこと、実習で得た具体的な体験や援助活動について振り返ることができるよう、実習前には実習計画書の指導を学内にて行い、実習中は訪問指導等を行っている。
ソーシャルワーク演習Ⅱ	2年	演習	前期	社会福祉士指定科目の一つである。ソーシャルワークの実践に必要な知識と技術の統合を行い、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていく能力の習得、支援を必要とする人を中心とした分野横断的な総合的かつ包括的な支援について基礎的に理解することができるようグループディスカッション等による演習形式で授業を行っている。
ソーシャルワーク演習Ⅲ	2年	演習	後期	社会福祉士指定科目の一つである。ソーシャルワークの実践に必要な知識と技術の統合を行い、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていく能力の習得、ミクロ・メゾ・マクロレベルにおけるソーシャルワークの対象と展開過程、実践モデルとアプローチについて実践的に理解できるよう、グループディスカッション等による演習形式で授業を行っている。
地域福祉論Ａ	2年	講義	前期	社会福祉士指定科目の一つである。受講生が地域福祉の基本的な考え方、展開、動向、地域福祉における主体と対象、住民の主体形成の理念を理解できるよう解説している。また、地域福祉を推進するための、福祉行財政の実施体制、地域福祉計画をはじめとした福祉計画の意義・目的及び展開の基礎的部分を理解できるよう解説を行っている。
地域福祉論Ｂ	2年	講義	後期	社会福祉士指定科目の一つである。前期開講の地域福祉論Ａと一体的な科目である。受講生が包括的支援体制の考え方と、多職種及び多機関協働の意義と実際、包括的支援体制における社会福祉士及び精神保健福祉士の役割を理解で

				きるよう解説を行っている。
社会福祉学特講Ⅱ(保健医療福祉のためのコミュニケーション論)	3年	講義	前期	選択科目の一つである。3学部の教員が共同体制で行う講義で、広く専門的な観点から、津軽や東北あるいは日本といった、視点を変えて津軽のような「方言主流社会」において、方言話者と非方言話者との共生について、また世代間交流の問題についても学べるようにする。高橋は「方言と暮らし」等3回分講義を担当している。
専門演習Ⅰ	3年	演習	通年	必修科目の一つである。レポート作成に必要な文献調査やインタビュー調査などの基礎的な知識を修得した後、各自が地域福祉に関する研究テーマを設定して自主的な調査活動を行う。また、その調査結果の中間報告・討論を通じて完成度を高めていけるようゼミナール形式で授業展開をしている。
社会福祉実習Ⅱ	3年	実習	通年	社会福祉士指定科目の一つである。実習先となる施設・機関の実習指導者と学内担当教員によるスーパービジョンを行い、履修学生が現場にてソーシャルワークの体験学習を行う。なお、社会福祉実習Ⅱは180時間の現場実習である。
社会福祉実習指導Ⅱ	3年	演習	通年	社会福祉士指定科目の一つである。社会福祉士として求められる役割を理解し価値と倫理に基づく専門職としての姿勢を養い、ソーシャルワーク機能を発揮するための能力を習得することを目指す。加えて、実習で得た具体的な体験や援助活動を専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができるよう、実習前には実習計画書の指導を学内にて行い、実習中は訪問指導等を行っている。また、実習後は報告会や報告書の作成指導を行っている。
専門演習Ⅱ	4年	演習	通年	選択科目の一つである。専門演習Ⅰで調べた内容について更に深く掘り下げて調査を行ってもらう。卒業論文に相当する内容の成果物を完成させられるように受講生一人ひとりがテーマを設定し、調査活動を行い報告し討論するゼミナール形式で授業をしている。

2. 教育の理念

現代社会において発生する生活問題、福祉的課題は多様化し、これらに立ち向かう実践が果敢に行われている。単に既存の社会福祉制度の範囲内で問題を効率的に解決することだけで終わらず、新たな社会福祉問題の解決方法、あるいは予防策といった開発的の視点を含んだ研究が求められる。本来、社会福祉は多様なテーマで研究されており、社会福祉士国家試験指定科目以外にも幅広い領域であることを学生の皆さんには知ってもらいたい。

この理念を実現するために以下の5つの個別理念を掲げる。

1. 学生自らが丹念に調べ情報を取捨選択し、自分の考えを表現できる力を伸ばすことを重視しながら学生に関わる。
2. 上記で学んだことを実習の現場や卒業後に実践できる力を養えるように関わる。
3. 様々な人々と協力して課題を克服する協調性を養えるように関わる。
4. 既存の考えの殻を破る、他の人が気づけないようなユニークな発想力を養えるように関わる。
5. 一人ひとりの学生が目標や夢を明確に形成し、その実現に向け着実に努力し続けることの尊さを教え、モチベーション維持の関りを大切にする。

3. 教育の方法

担当する講義・演習・実習・実習指導いずれも、シラバスに到達目標、評価基準を明確に示している。また、各回のテーマを示し指定テキストの該当部分を予習しやすく配慮している。各科目での教育の方法については以下の通りである。

1. 社会福祉専門科目(地域福祉論Ａ・Ｂ)の講義の場合

講義で紹介する内容が実社会とどのように関係があるのかを意識してもらえるように努めている。とくに、全国と青森県の比較、地元の弘前市で取り組まれている地域福祉活動の実践例、災害支援等の時事な話題等を積極的に取り入れている。地域課題(空き家活用、地域福祉計画を多くの市民に身近に感じてもらうためにはどうしたらよいか等)を取り上げ、解決に向け学生目線でのアイデアを記入してもらうレポート課題をだしている。このレポートで出された意見を担当教員として整理し授業時にフィードバックするような機会も設け、卒業後に地域社会と自らがどのように関わるべきかを意識してもらっている。また、関心を持った取組事例や現場を見に行くことをお勧めしている。

2. 社会福祉専門科目の演習の場合

予習シートを配布し事例検討に入る前に必要な専門知識、制度知識を蓄積してもらえるように促している。演習の授業本番においては毎回グループディスカッション、ロールプレイ、プレゼンテーションを取り入れ、学生が主体的に学べる環境を作っている。授業終了10分前に振り返りシートを記入してもらい、毎回の授業成果と残された課題を各自に書いてもらうことで学習意欲の向上に繋げている。誤字脱字の確認、文章のねじれ等を確認の上、必要に応じてコメントを加えて返却している。

3. 社会福祉専門科目の実習・実習指導の場合

学生が実習配属先の施設や機関の設置根拠法、提供しているサービスの内容、配置されている各専門職と職員同士のチーム対応、利用者の特性、当該分野におけるソーシャルワークの過程について履修者自らが積極的に復習してくれるように促している。それを踏まえて実習において特に深堀りして学びたいテーマをイメージできるように個別対応を行っている。実習中には施設への訪問指導等を行い、実習後にはその成果と残された課題を整理し実習報告書を完成させられるよう、個別指導も合わせて行っている。

4.教育の成果

1. 社会福祉専門科目(地域福祉論Ａ・Ｂ)の講義の場合
　授業評価アンケートによれば、Ｃ「授業内容に対する評価」に関して問18. 総合評価については、すべて3.0以上で評価する学生で占められていた。問13. 授業の難易度や学習範囲の量が多いことへの反応についてである。学部平均点や全学平均点よりも上回り3.0以上をつけた学生で占められているため適切な難易度での講義ができたと考える。
2. 社会福祉専門科目の演習の場合
　実習と連動する科目としてソーシャルワークの過程を疑似体験的に学ぶことができている。授業評価アンケートの結果からもそれが読み取れる。また、ソーシャルワーク演習Ⅰにおいてはルーブリック評価を試験的に導入できた。
3. 社会福祉専門科目の実習・実習指導の場合
　福祉施設の現場指導者と連携し学生が無事に実習を行うことができた。コロナ禍においても感染状況を見極め、実習期間を設定し現場で実習を行うことができた。実習後には報告会を開催しグループディスカッションによる学生主体の学びの提供ができた。実習報告書も履修者全員が書き上げることができた。
4. 基礎演習Ⅱの場合
　資料収集をもとに800字程度の小レポートを作成してもらい、レポート発表とグループディスカッションを行うことができた。学生一人ひとりがレポートを書き貯める形で最終レポートとして仕上げることができた。
5. 専門演習Ⅰ・Ⅱの場合
　専門演習Ⅰにおいては、各自テーマとして取り上げた課題の発生過程、課題の解決方法など文献資料で得られた知見を整理しレポート発表とグループディスカッションを行うことができた。学生一人ひとりがレポートを書き貯める形で最終レポートとして仕上げることができた。専門演習Ⅱについてはここ数年履修希望者がなかった。

5.教育の改善

1. 社会福祉専門科目(地域福祉論Ａ・Ｂ)の講義の場合
　授業評価アンケートによれば、Ａ「学生自身の自己評価」に関して問1. この授業によく出席しているという項目で、平均点を下回っている。毎回出席をとっているものの、1/3を超えない程度に休んでしまう受講生が複数いるためである。今後は2回以上欠席した学生に対してTeams(チャット)で個別連絡をとるように改善したい。問3. 予習と復習の取り組み状況についての項目である。学部平均点、全学平均点よりも上回っているものの、一部の学生が低い評価をしていた。定期試験には各講義回からまんべんなく出題し復習を義務化しているが、予習課題の量が少なかった。この点も改善したい。
2. 社会福祉専門科目の演習の場合
　関連が深いソーシャルワーク論等の講義科目で学習した事前の知識が不足すると本授業において事例を検討する上で難しさを感じてしまう学生が発生する。本授業で必要な知識を予習シート記入によって備えられるよう、予習シートの内容を改善していきたい。
3. 社会福祉専門科目の実習・実習指導の場合
　社会福祉士養成の新課程において従来の実習で学ぶ項目に追加された項目があり、実習で全ての項目を網羅的に体験学習することが困難である。実習において体験学習できなかった項目について事後学習授業において実践的に学べるよう教材を作っていきたい。
4.　専門演習Ⅰの場合
　学生が興味関心のテーマを設定できるように根気強く待つ姿勢が求められる。質問に答えるうちに先行研究や取組事例、仮説の設定の仕方などヒントを出し過ぎてしまう傾向にある。調べてみても詳細がわからなかった等、明確な答えが無い領域にも果敢に挑戦していけるよう見守り、支える姿勢に徹したい。

6. 教育の目標

授業評価アンケートにおいて学生から指摘された部分について改善を図り、とくに学生が主体的に事前学習や事後学修を進んで行えるよう教材の工夫や教授方法について工夫していきたい。

自分で考えて積極的に行動できる学生を育てる。

実習に向けた関わりや実習後の振り返りの指導によってあるいは、基礎演習や専門演習による関わりによって、学生一人ひとりが目標や夢を明確に形成し、その実現に向け着実に努力し続けることの尊さを教え、モチベーション維持の関わりを大切にする。これによってドロップアウトしてしまう学生を減らせるよう微力を尽くしたい。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 授業改善書
4. ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ振り返りシート
5. ソーシャルワーク演習Ⅰルーブリック表(試行段階)
6. 地域福祉論　学生提出レポート「空き家活用アイデア」情報整理結果